

素材と関わる造形の授業実践についての一考察

—保育者・教員養成校での造形遊びと立体・工作の実践から—

A study on Teaching Practices in Art Education Using Materials

—Artistic Play and Tridimensional Modeling and Handicraft in Childhood Educators Training Facilities—

大坂一成*・須増啓之**

要 旨

本稿では、神戸親和女子大学の1年生開講科目「美術Ⅰ」における授業の組み立ての経緯と、新聞紙や木を使った実践について報告する。授業を組み立てる際、1年生時に造形の共通体験として何が必要かを考え、作品づくりを主にした授業だけでなく、素材や行為を楽しむ造形遊びの要素を取り入れた授業の割合を多くした。その結果、表現を楽しむ学生や教育の視点を意識する学生などの姿が多く見られ、1年生時において造形遊びの題材を多く取り入れることの有効性を見出せた。

キーワード：素材 造形遊び 立体・工作 過程を楽しむ 授業実践

1 はじめに

神戸親和女子大学発達教育学部児童教育学科では、1年生春学期開講科目「美術Ⅰ」（選択）と秋学期開講科目「美術Ⅱ」（選択）が、保育内容にかかわる領域「表現」の造形や小学校図画工作科の内容の基礎について学ぶ科目として開講されている。これらの授業は担当教員2名で行い、学生が2グループに分かれて7回ずつ交互に受けるスイッチ形態を採用している。また、「美術Ⅰ」は1年生全員を対象に行われるが、「美術Ⅱ」からは大きく保育学コースと幼児教育学コース・初等教育学コースにクラスを分けて、それぞれ専門的な内容について学んでいく。

2018年度より担当者の変更に伴い、立体・工作担当の大坂に加えて、平面の授業を須増が担当することになった。須増は2年生で指導法に関する科目も担当しているが、授業のなかで他者と比べて差を気にして活動が止まってしまう学生が多いという印象を持った。また、グループ活動などを通してつくることや見ることの楽しさを2年生時において発見する学生も多いと

* 神戸親和女子大学 非常勤講師

** 神戸親和女子大学 発達教育学部 児童教育学科 助教

感じた。

そのような個人的感想から、1年生の授業を担当するにあたって、春学期において共通の体験としてどのような内容が重要であるのかという点について考える必要があった。そこで担当者で検討し、新たに授業を組み立てていくことにした。

本稿では、1年生が最初に受ける共通体験としての「美術Ⅰ」について、授業実践の取り組みや学生の活動の様子を踏まえて報告する。

(須増啓之)

2 作品づくりから素材を楽しむ造形遊びを取り入れた活動へ

それまでの「美術Ⅰ」の授業はできるだけ多くの体験をさせるため、1時間で終わり、かつ個人作品として完成することを目的としたものが多かった。15回の授業に多くの題材を詰め込みすぎた結果、学生が題材や素材とじっくりとかかわって楽しむ時間を持てなかったと思われる。

そこで、授業内容を考える際に、素材とじっくりとかかわることができる造形遊びを取り入れた題材が有効ではないかと考えた。小学校学習指導要領解説では造形遊びの大まかな内容として「児童が材料などに進んで働きかけ、自分の感覚や行為を通して捉えた形や色などからイメージをもち、思いのままに発想や構想を繰り返し、技能を働かせてつくること」と記されている¹⁾。ここでは造形遊びを取り入れた授業構成と、それに関連して素材を楽しむ体験を重視することの必要性について考えていく。

2-1 造形遊びの要素を取り入れた題材配列

1時間で完成させる作品づくりの授業から造形遊びの要素を取り入れた授業展開について、松岡宏明の題材配列の視点を参考にした。松岡は『美術教育概論（新訂版）』のなかで、幼児の造形の題材を設定する基本的な視点から題材の配列を提案している。具体的には、3歳児には「材料との出会いや行為そのものを楽しむ遊び」や「見立て遊び（材料・技法・形・色からの発想）」を重視し、5歳児では「身近な人や動物などへの思いを持って描く、つくる」「自分の思いや願いを伝える表現」の題材を多くしていくと述べている²⁾。

この題材を設定する視点は幼児の造形のみにはまるものではなく、中学校以降、描いたり、つくったりなどの体験をしていない多くの学生にとっても当てはまるのではないかと考えた。材料や行為などを楽しむことを体験していない学生にとって、いきなり思いや願いを伝えるもしくはテーマに沿った作品づくりに重きを置くと、「上手一下手」などの一義的な価値観で活動を捉えてしまうことが多くなる傾向がある。大学生においても、材料や行為から体験させていくことで、安心感や楽しさを味わっていく題材配列が有効であると考えられる。つまり、小学校図画工作科の内容の語句を使うのであれば、材料に働きかけて思いのままに発想や構想を

繰り返してつくる「造形遊びをする活動」の要素から、目的やテーマを基に表現していく「絵や立体、工作に表す活動」の要素へと徐々に移行させ、学生が経験を積んでいくことが重要であると考えた。

そこで、松岡の幼児における題材配列を参考にして、本学における「美術Ⅰ」や「美術Ⅱ」の題材配列を考えると以下ようになる（図１）³⁾。

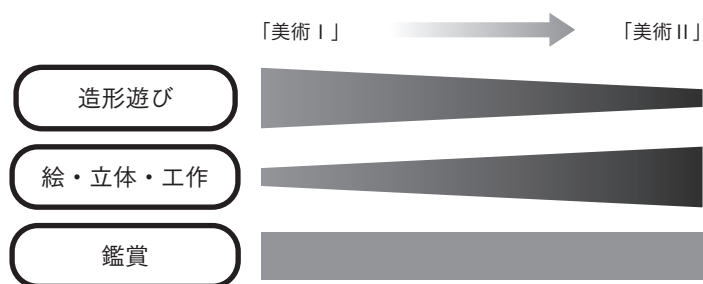


図1 本学での題材配列（松岡宏明の題材配列を参考に筆者が作成）

まずは、「美術Ⅰ」では作品づくりに重きを置くのではなく、素材や材料にかかわる機会を多く持つことにした。そして各専門に分かれる「美術Ⅱ」では目標などを明確にし、テーマなどを持つ題材を増やしていくように考えた。「美術Ⅰ」と「美術Ⅱ」が分断されるのではなく、「造形遊び」から「絵や立体、工作」へとつながるように題材を配列していく必要がある。また表現することだけでなく、鑑賞も充実させた授業内容を計画していくことにした。

2-2 素材とのかかわりや過程を重視する授業内容へ

前述のように造形遊びの要素を取り入れた授業にしていくためには、素材や行為と十分にかかわる体験を中心に考えていく必要がある。つまり、授業内容を考える際、どのような素材や行為との出会いや体験を学生に提供していくかが重要となる。そこで、保育所保育指針や小学校学習指導要領などにおける素材や材料に関する記述を調べ、学生が授業で出会う素材や行為について考えていくことにした。

小学校の図画工作科の「造形遊びをする」では、材料として「児童が関心や意欲をもつ、土や砂、粘土や木切れ、紙、絵の具など、児童に身近なもの」が考えられるとし、学年が進むにつれて「場所や空間」に活動が展開していくと記されている⁴⁾。

また、保育所保育指針の「1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容」の領域「表現」において、素材について「水、砂、土、紙、粘土など様々な素材に触れて楽しむ」とある⁵⁾。そして「3歳以上児の保育に関するねらい及び内容」では、「いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。」とある⁶⁾。さらに「内容の取扱い」では、以下のように記されている⁷⁾。

生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、道具や用具などを整えたり、様々な素材や表現の仕方に親しんだり、他の子どもの表現に触れられるように配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。

このように幼児教育や小学校教育において、自分なりに様々な素材に親しむことやかわることが重要であるといえる。それは同時に過程を重視し、楽しむことにつながっていく。つまり、素材に親しむことの楽しさと共に、過程を大切にできる力も育てていく必要があると考える。表現することの楽しさについては、平成29年10月に策定された教職課程コアカリキュラムの「幼児と表現A」の到達目標番号（2）-3）においても「表現することの楽しさを実感するとともに、楽しさを生み出す要因について分析することができる」と記されている。その点について郡司は以下のように述べている⁸⁾。

原初的な感触による遊びをはじめとし多様な素材に触れる遊びや、身近な素材・用具を用いて描く、つくるといった表現活動を通じて、学生の表現における経験の幅を広げ知識技能の向上を図るとともに、表現する楽しさを生み出す要因について分析する機会を設ける。

つまり、保育者や教員を目指す学生の経験として、素材に触れる遊びなどを単に楽しむだけではなく、楽しさを生み出す要因についても考えていく必要がある。素材や材料、行為を楽しむ造形遊びの要素を多くして授業を組み立てていくことは、学生自身が表現における経験の幅を広げ、表現する過程を楽しみながら保育や教育について考えるきっかけになるのではないかと考えた。

2-3 「美術Ⅰ」の授業について

以上、「美術Ⅰ」の授業を組み立てる際に重視したことについて、大きく2つの側面から述べてきた。その他、重視した点や具体的な授業内容の取り組みについては別の機会に譲るが、以下、シラバスの授業目標について記しておく。

- ・様々な素材や材料、道具に触れ、その特性を理解し、造形指導の基礎的な知識や技能、発想や構想の能力を身につける。
- ・制作活動や鑑賞活動を通して、他者の考え方や造形に触れながら、自分とは異なる表現を認め、楽しむことができるようになる。
- ・子供の造形や内容について、活動を通して理解する。

- ・造形活動に関心を持ち、造形指導への意欲を培う。
- ・授業で行った活動について、自分なりに記録としてまとめることができる。

上記の目標を基に2018年度の「美術Ⅰ」の実践を行った。須増の担当する平面での実践はパスや絵の具での「色をぬろう」などの題材だが、すでに拙著論文などで述べている⁹⁾。そのため本稿では身近な素材に触れるという意味で、立体や工作における具体的な実践について授業担当の大坂の方から述べていく。ただ、大学の授業では教室などの環境や授業予算も関係するため、体験させたい素材や行為が限定されるという課題もあった。今回、特に大きく変更した実践「紙でつくろう」と「木でつくろう」について報告する。

(須増啓之)

3 授業実践① ～紙でつくろう～

3-1 素材、題材について

紙を使った題材の導入・動機づけとして「情報を伝える以外の新聞紙の役割(何かの梱包素材、作業用下敷きなど)」、「実践当日までに素材である新聞紙を大量に収集したこと」、「子供の遊び道具としての関係と素材との出会いの大切さ」の3点を重視した。

新聞紙を選んだ理由は、紙の中でも新聞紙は日常の生活に存在する紙であり、古紙を使用することでリサイクルの意識を養うことに繋がると考えたからである。また、子供にとって新聞紙の大きさは形状を変化させる場合、身体全体を動かすことになる。さらに、軽さという点からも大変扱いやすく、「クシャクシャ」「ビリビリ」というような「丸める」「破る」「折る」「繋げる」などの活動がダイナミックに展開できる素材であると考えた。

以下、「簡単な新聞紙の造形」と「教室の空間を使った造形遊び」の実践について報告する。

3-2 簡単な新聞紙の造形 ～「筒で遊ぶ」～

まず新聞紙1枚をはさみで半分に切り、直径2～3cmの太さに巻いてのり付けをし、円柱状の筒をつくる。その筒の形から中心部の穴を覗き込む望遠鏡遊びや指先の上に立てるバランス遊びなどを学生に考えさせた。また、片方の端の中芯部を引っ張り出し、長く伸ばして剣のような形状に変化させることでチャンバラごっこ遊びへと展開させると、近くの席の学生同士で笑い合いながらポーズをとりだした。

そのあと新たに筒を1本つくり、先端の部分に2cm程の切り込みをいくつか入れて、片方の端の中芯部をねじりながら引っ張り出す活動を行った。簡単にできたクリスマスツリーののようなギザギザの造形(図2)に、学生は驚きの表情を浮かべ、頭上で振り回して楽しむ姿が見られた。

次の活動として、新聞紙1枚で筒をつくる。筒の中央部をつぶして、20cm程を四角く半分

切り抜き、その筒を左右に折り曲げ、中央の切り抜き部分を上に引っ張り上げるとはしごのような造形が現れる。この時、一人でつくる工程から友達の助けが必要となる共同作業が発生し、学生たちのコミュニケーションが活発になっていった。新聞紙の工作としては、想像以上の不思議な造形の展開に、学生は満足そうに笑みを浮かべていた。

さらに、その筒を二つに折り曲げて中央のはしごの部分でラクロスのラケットに見立て、そこにカラフルボールを投入し、キャッチボール遊びに発展させた。新聞紙がスポーツの道具として変化したことを楽しみを感じた学生は、グループでキャッチボール遊びを続けた(図3)。新聞紙でできる簡単な造形の紹介から学生を授業に引き込むことが筆者のねらいであったが、学生たちの楽しむ姿から達成できたと考える。

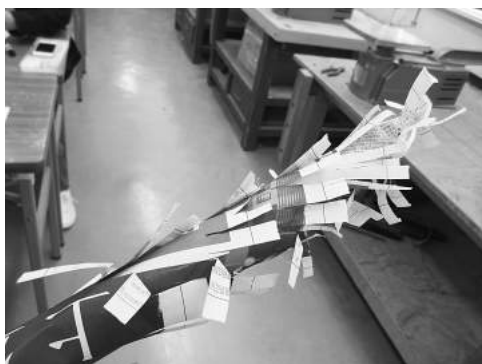


図2 筒をねじりながら引っ張り出した形



図3 キャッチボール遊びを楽しむ学生

【学生の感想より】

- ・「子供にはさみを持たせた時、どういう使い方をするだろう」とか、「ここはもっと切るべきだなあ」とか考え、新しい発見ができて楽しかった。はしごは友達と「こうやって投げたら飛ぶよ!」とか「こうやって持ったら取りやすいよ」などコミュニケーションをたくさんとることができた。
- ・自分ひとりで新聞紙を破いたり貼ったりするのではなく、みんなでする楽しさを学べたと思います。新聞紙で、ラクロスみたいにボールを挟んでなげて遊ぶことをこの授業で初めてやってみて、本当に幼少期に戻った気がしました。あと、はしごをつくることで、新聞紙だけでもたくさん工作ができることにとても驚きました。いらなくなった新聞紙を捨てるのではなく、こうしてつくって遊び、終わって捨てる方がいいのかなと思いました。
- ・新聞紙と言えば、ビリビリに破いたり、折って遊んだりというのが私の中でのイメージでしたが、切ったり、引っ張ったりと少し考えるだけで自由自在にアレンジできるということを知りました。

3-3 教室の空間を使った造形遊び ～「大きな紙」「つないでつるして」～

●「大きな紙」

個人での体験であった「筒で遊ぶ」のあと、教室全体を使用して全員で行う活動「大きな紙」につなげた。

まず教室の机を隅に移動し、中央に大きな空間をつくり、広く活動できる場所を確保した。次に新聞紙1枚を広げて中央から次々にのりで繋げていき、巨大な紙をつくる(図4)。この段階で一つの共同作業から生まれるコミュニケーションが学生間で活発になっていく。教室全体に一つの大きな紙が完成した後、新聞を持ち上げて中に潜り込むグループと、その活動を外から眺めるグループに分け、交互に体験させることにした。新聞紙の造形を挟んで外からの形の変化を楽しむ視点(図5)と、内部に入り込んで形に抱擁された視点(図6)といった作品の多様な見方・感じ方を学生に身に付けてほしいと考えたからである。

最後に内部に入り込んだグループは、新聞紙を内から破って外の空間に出てきてもらい、外と内を繋げる空間遊びの瞬間を全員で共有した(図7)。また、破れた新聞紙をさらに細かくちぎり、つくり上げる活動から真逆の破壊する活動へと展開させることで、学生たちに単に作品制作を試みる授業からの思考の展開を求めた(図8)。



図4 新聞紙を貼り合わせて大きな紙をつくる



図5 外側の形の変化を楽しむ学生の視点



図6 内部の形に抱擁された学生の視点



図7 内から破り、外の空間に出る瞬間



図8 新聞紙をさらに細かくちぎる様子

●「つないでつるして」

次に、教室の四隅に背の高いイーゼルを設置し、ビニール紐で対角に結び、それを中心にして教室の紐が結べる箇所からもランダムに結んでいった。そこへ「筒で遊ぶ」で造形した作品や、床に落ちている「大きな紙」の活動でできた新聞紙の断片をホッチキスなどで自由に結び、吊り下げていった（図9）。しばらくすると、共同作業でつくり上げたクモの巣のような空間に学生たちは身を置くことで、空間全体が作品に包まれた雰囲気になった。

通常、学生の作品鑑賞の場合、他の学生の作品と自己の作品の違いを客観的に比較することが多い。しかし、ここでの鑑賞は作品自体に身を置き、その空間全体の変化を見たり、聞いたり、感じたり、考えたりするなどの自分なりの感覚を通して追体験していくことになった。

最後に、教室全体が不思議な空間になったところで、床に落ちて残っている新聞紙の断片を学生一人ひとりが拾い上げ、「セーの」の掛け声とともに一斉に天上に放り投げた（図10）。紙吹雪のような空間に包まれた学生たちの盛り上がりが最高潮となった瞬間であった。



図9 新聞紙を紐に結び吊り下げる



図10 天井に新聞紙を放り投げる学生たち

【学生の感想より】

- ・最初はまだ全く話したことの無い人や、初めて顔を見る人達ばかりで、つくる前から少し緊張していた。新聞紙をちぎって天上にあげる作業では、みんなが真剣にちぎっている姿が面白くて、自然と笑い、天上に向かって新聞紙を投げることでさらに笑い、みんなでやる楽しさがとても感じられたと思います。最後に吊るしていく作業では、まだしゃべったことの無い人が、一緒に手伝ってくれたことで仲良くなりました。この活動は、どれも協力性が全部含まれていて最高の遊びでした。子供たちと行ったら考えると、早くしたいという気持ちがさらに増しました。
- ・新聞紙でたくさんの遊び方があったことがわかりました。個人でつくって遊べたり、全員で協力して遊べたりできて、とても楽しかったです。大きな新聞紙で遊ぶのは家ではできないことだったので、そのような場をつくってあげたいと思いました。今まで経験したことのない遊び方です。大きな新聞の外と中では、まったく違う光景が見え、外では大きな新聞が怪物のように動き出し、中では少し暗い空間に光がすけて落ちてく空間でした。もっと工夫して新聞紙の遊び方を増やしたいです。

(大坂一成)

4 授業実践② ～木でつくろう～

4-1 素材、題材について

木を使った題材では「素材である木の種類や特徴などを紹介し、親しみを持つ」、「のこぎりなどの加工する為の道具の正しい手順や使用方法を学び、子供とのかかわり方を考える」、「子供の遊び道具をつくることでできる発想と展開の大切さを学ぶ」の3点を導入や動機づけとして重視した。

木は、最も長く人とかかわっている素材の一つであり、木の部位によってそれぞれ違った性質を持っている。その特性を知ったうえで、子供たちの教材として活用することはとても大切なことである。木は金属など他の素材に比べて人にやさしく、しかも面白みのある材料であり、加工する段階で温かさやぬくもりを感じられる素材である。今回、輸入材のため安価で、材質は比較的に軽くて柔らかく、切断や切削などの加工も容易であるSPF材を使用することにした。

以下、木を「切る、削る」と「刻む、塗る」の実践について報告する。

4-2 木でつくろう ～きる、けずる～

●「木を切る」

まず、木を切断するための道具として、のこぎりの正しい使用方法を説明した。両刃のこぎりの縦引き用と横引き用の刃の説明をして、木材の製材の取り方により現れる板目、柃目などの木目に対して両刃のどちらを使用するかを学生に考えさせた。

次に、SPF材（厚み 2 cm、幅 9 cm）を 2 人 1 組で 15cm の長さに切り、1 人分の材料を準備する（図11）。切り始めは細かく動かして切り込みを入れ、刃の位置を決めることを学生の前で実演した。木材を机上で座って切断しようとしていた学生には、立ち上がることを促す。切るときの姿勢は、右利きの場合は左足を少し前に出し、体にのこぎりの動きが邪魔されないように指示した。余分な力が入っている学生には、刃わたりいっぱいを使い、引くときに軽く力が入るように、真っ直ぐに切れない学生には、目線と刃の上端が 1 本の線になるようにとアドバイスをした。

学生は本格的なのこぎりの使用方法を学び、短時間で真っ直ぐに切れたことで道具の正しい知識を習得し、かつ作業をする楽しさを感じている様子であった。その後、15cm の長さに切れた木を不規則な大きさの三角形や四角形で 6 つに分割する課題の内容を黒板で例を示しながら紹介した。また、小さくなった木を切るのに、抑える力が足りない学生には万力を使用させた（図12）。分割の仕方を学生たちに任せたことは、後の組み合わせた時の形の違いの展開に繋がると考えたからである。またこの課題の途中で、学生は自分の作品で子供たちと積み木遊びができることに気づき出し、積んで遊ぶ姿が見られた。



図11 1 人分の材料を協力して切る



図12 万力の使用で木を切る学生の様子

●「木を削る、磨く」

切ったばかりの木は切断面が粗いので、木工ヤスリを使用して角を落として丸みをつけることから始めた（図13）。のこぎりは引くと切れたが、木工ヤスリはその逆で押すと削れることを説明する。のこぎりを使う時と同じく、効率よく楽に削るには固定が重要なポイントになり、木を 1 mm 以上削る時は木工ヤスリを使った方が良いことも付け加えた。

次にサンドペーパーの作業に移り、目の粗い番手から細かい番手へ順に磨きあげることで効果を確認しながら、子供たちが触れる遊具として相応しいものに仕上げる時間を取る（図14）。学生たちは手の中で変化する木の表情や木肌のぬくもりをじっくりと感じていた。また、サンドペーパーの種類や番手の見方や使用方法を紹介することで、正しい知識のなかで学生が

素材の表情の変化を知る機会となった。



図13 木工ヤスリで角を落とす様子



図14 サンドペーパーをかける様子

【学生の感想より】

- ・自分の中ではわかっていることでも、子供は使い方を知らないことがたくさんあるので、教える時は一から説明しようと思いました。道具を使う時も、改めて意識しながら注意点を確認したいと思いました。
- ・小さくなればなるほど切るのが難しくなって、力の入れ方とかも工夫しないといけないなと思った。切る角度も、強すぎても弱すぎても切れにくいので説明する時は、まず前で見本を見せるべきだなと思った。のこぎりは普段あまり使わない道具なので切っていてワクワクしたし、「自分で木を切る」ということがとても楽しかった。
- ・木の角をきれいに丸くするのは少し難しかったです。ヤスリは細かい面と荒い面の使い分けが大切だなと改めて思いました。子供たちは初めて使う道具なので、とてもわくわくして楽しむだろうなと思いました。

4-3 木でつくろう ～きざむ、ぬる～

●「木を刻む」

はじめに小刀の使い方を正しく習得するため、割箸の先を刻む実践を試みた。まず、小刀には右利き左利きがあり、学級運営をするにあたっては、クラス人数の2～3割程度の左利きの子供たちが存在すると考え、準備しておくことを伝えた。次に、小刀が子供たちにとって使用方法を誤ると大変危険なものになることを説明した。そして、小刀の管理や削る素材の割箸の材質を紹介した後、実際小刀を手にとって学生たちの前で実演した。割箸を刻む場合は小刀を手に取り、利き手でない親指を刃の背に添え、小刀を持つ手を動かすのではなく、刃の背に添えた親指で動かすイメージで、焦らずゆっくり刻むことを促した。学生が割箸と刃先との接点を真剣に見つめて刻む姿から、集中して取り組んでいる様子が伺えた（図15）。



図15 小刀で割箸を刻む学生の様子

●「木を塗る」

次につくった形に色を塗っていく。木材を着色する際には、絵の具と水の割合が重要である。最初は水を多めに含んだ絵の具を塗り、全体に色が定着したところで水分の量を減らした同じ絵の具で2度塗りをすることを勧めた。また今回は、形と色の関係から生まれる積み木の造形遊びの要素を楽しむため、それぞれの木の着色を変えることを指示した。できるだけ色と形の関係性を感じてほしいと考えたからである。学生たちは自分のお気に入りの色を選択し、着色することで木への愛着が増している様子であった（図16）。この段階になると仕上げの最終場面ということもあり、着色された木に水玉や斜線の模様を付け加える学生、「果物」「お花畑」「寿司」などのテーマをイメージする学生など、自分なりに工夫する姿が見られた（図17）。

今回、色を塗った後、それらを使って全員で並べたり、積んだりする造形遊びへの展開を考えていたが、時間の都合上、無理であった。ただ、制作の中で造形遊びを試みる学生は多く見受けられたことは付け加えておく。



図16 木に着色する学生の様子

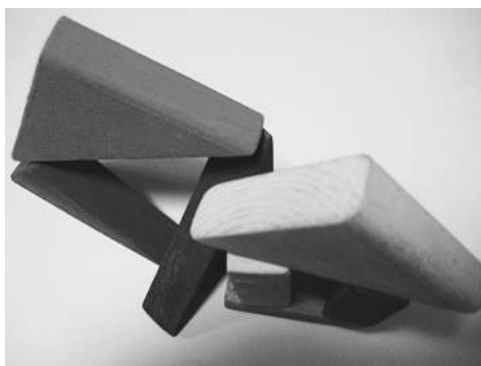


図17 並べたり、積んだりして遊ぶ

【学生の感想より】

- ・今までの授業をしてきた中で、最も扱うのに危険な作業だったと思います。それを子供たちにどう説明したら危険を防げるのか考えさせられ、何より子供たちにケガをさせないことが一番大切だと感じました。
- ・小刀で削るのは面白かった。昔の人は、鉛筆削りがないから、こんな風に小刀とかカッターとかで削っていて大変だと思いました。もっと細かく削り、鳥や魚など削ってみたい、自分の思うものを削れたら楽しいだろうと思いました。
- ・絵の具でカラフルに色を塗ることで見た目も明るくなって、子供が使う時は、普通の色のついていない積み木より色のついた積み木の方に目がつきそうだった。子供の好奇心を高めるためにはどうしたらいいか、自分で考える力がとても必要だと思うことができて良かったです。
- ・子供たちが色を塗った後にテーマや題をつけることや、何人かのグループで話し合って色を塗るのもいいかなと思いました。
- ・これまでの授業をするまでは、この作業はどういう意味・目的であるのかを考えたことがありませんでした。でも保育者の立場に立って考えてみると、たくさんの注意しなければいけないところ、何でこの作業が危険なのか、この答えについて全て意味が含まれていることを知ることができました。授業を重ねていくうちに自然と、この作業を子供たちに教えるためには、どうやって自分で工夫したらいいかなと考えるまでになっていました。でもまだ考えるだけで、実践ができていないので、これから実習をしていくなかで実践していければいいなと考えています。

(大坂一成)

5 「紙でつくろう」「木でつくろう」の実践からの考察

以上、二つの実践について報告した。一つは机上で出来る簡単な新聞紙の造形と教室全体の空間を使った造形遊びであり、もう一つは木と道具との関係を学ぶ造形活動であった。それらの実践では、両極端な硬さの違う素材の特徴を考えながら、子供へのかかわり方を考える必要があった。

「紙でつくろう」では、新聞紙が情報を伝える本来の役割から離れ、子供の興味や関心を引く造形や遊び道具の一部に変化し、授業を通して様々な発見や出会いの活動になったと考える。「木でつくろう」では、道具を正しく扱うことでその便利さを知り、素材とのかかわり方や、素材の表情の変化を学習できたと考える。

また、活動においては単に自己の作品づくりに終始するのではなく、常に子供に指導する立場で取り組むように学生たちに頻繁に声かけを試みた。その結果、子供の気持ちを考え、指導者の立場で自発的に授業に取り組む姿勢が感想などからも伺えたことは貴重である。本稿で取

り上げた実践は、1年生の最初の取り組みであり、学生たちにとって「造形」や「図画工作」の入り口として、またはコミュニケーションをつくるといった役割が強い。そのため、描いたり、つくったりすることに関する「上手—下手」といった一義的な価値観を覆すひとつの糸口となったと考える。

2018度から、多様なものづくりを中心とした1回ずつの授業から、素材を絞り込み、造形遊びの時間を多く取り入れたに授業に移行した。その結果、学生の美術嫌いや苦手意識が取り除かれ、共同制作から他者との協調性を多く学んだことが学生の授業での様子や授業ノートの記述から読み取れた。それらは授業実践の成果として挙げることができると考えられる。

指導者にとって、子供たちが「つくりたい」「参加したい」と思うような環境や状況をつくり、子供の感動や感情を育てる表現活動の場を確保することが重要となる。授業の時間的配分や素材の種類の検討を考えながら、子供にとって相応しい指導者を養成していくことが、今後の課題となる。

(大坂一成)

6 おわりに

本稿は、作品づくりを目的にした授業から素材や行為を楽しむ造形遊びの要素を取り入れた「美術Ⅰ」の立体表現の授業実践について述べてきたが、報告のみに留まってしまっている。確かに「美術Ⅰ」は大坂が述べているように、表現を楽しむ学生が多くいたことから、美術教育の入り口として一定の効果があったと考えられる。しかし、造形遊びが授業を組み立てる要素として十分でないことも理解している。まずは実践を行ったが、今後さらに題材の内容や授業方法について検討を行い、改善していく必要がある。

また、幼児教育や小学校教育での表現の意義を理解し、楽しさを伝えることができるようになるためには、そのあとの「美術Ⅱ」や指導法へのつなげ方や授業内容が重要となってくる。そのためには「美術Ⅰ」を受講した学生が、「美術Ⅱ」や指導法の授業での取り組み方や考え方に変化があるのかなどを追跡調査していく必要がある。そして、担当教員が何を重視するかを明確にし、視点を拡張して多様なアプローチで授業を構築していく方法を探っていくことが今後の課題であると考えられる。

(須増啓之)

【註】

- 1) 文部科学省、『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 図画工作編』，日本文教出版，p.26，2018年2月
- 2) 松岡宏明，『美術教育概論（新訂版）』，大橋功他編著，日本文教出版，p.76，2018年10月
- 3) 松岡，前掲，p.77

- 4) 文部科学省, 前掲, p.26
- 5) 厚生労働省, 『平成29年告示 保育所保育指針』, p.32
- 6) 厚生労働省, 前掲, p.46
- 7) 厚生労働省, 前掲, p.47
- 8) 郡司明子, 『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案～』, 保育教諭養成課程研究会編, 萌文書林, p.56, 2017年11月
- 9) 須増啓之, 『「図画工作」における映像教材の活用と授業実践の変化』, 神戸親和女子大学児童教育学研究第36号, pp.65-76, 2017年3月